

外聞がいぶんの憚りはばか之を存し、今に正義しやうぎを宣のたまはずば我が弟子等定めて遺恨有らんか。又抑おさ時の失はな之有る故に今粗ほ之を注す。志有る者度々之を聞き其それを終りて後のち之を送れ。咸ことごとく三度を以て限りと為して聴聞を為なすべし。其の後のち

顯けん仏ぶつ未來みらい記き

文永十年（一二七三）閏五月十一日。五十二歳。於佐渡一谷。十二紙完
身延山久遠寺曾存。（定七三八頁 原漢文）

沙門 日蓮 之を期かんがう

法華經の第七に云く、「我が滅度の後のちの五百歳の中、閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして、断絶せしむることなかれ」等云云。予よ、一たびは歎なげきて云く、仏滅後既に二千二百二十余年を隔つ。何いかなる罪業ざいごうに依りて仏の在世ざいせいに生れず、正法しやうぼうの四依しえ、像法ぞうぼうの中なかの天台・伝教等にも値あわざるやと。亦一たびは喜よろこびて云く、何いかなる幸さいわいありて後五百歳ごひやくさいに生れて此の真文しんもんを拜見らいけんすることぞ。在世ざいせいも無益むやくなり。前四味ぜんしほの人は未だ法華經を聞かず。正・像も又由無よしし。南三北七なんさんほくしち並に華嚴・真言等の学者は法華經を信ぜず。天台大師たいたいだいし云く、「後の五百歳、遠く妙道めうだうに沾うるわん」等云云。広宣流布こうせんるふの時を指さすか。伝教大師でんけうだいし云く、「正・像や稍過やぎ已おりて末法まはは太ただ近ちかきに有あり」等云云。末法の始めを願樂がんらくするの言ことばなり。時代を以て果報を論ずれば、竜樹りゆうじゆ・天親てんじんに超過ちやうこし、天台・伝教にも勝すぐるゝなり。